

丸」最後二隻目に乗ることができ得た。ここに来て初めて間違いなく祖国に帰る事ができると確信し、一度に体の力が抜ける心地がした。

そして船が港を出、舞鶴港に入港し、祖国帰還の第一歩を印した。

そのの棧橋で婦人会の心づくしのさつまいも一個のうまかった事は、いまだに忘れられない。

今思うと、よくぞ三年有余の抑留生活を生き抜いて来たもの、我ながら奇跡であったと思う。これも、神仏の加護のたまものと感謝している昨今である。

回顧

静岡県 市川 柁夫

「働かざる者は食うべからず」社会主義社会のスローガンの許に、日夜の別なく、独裁者スターリンの意のままに、ひたすら私達は飢えと寒さと闘いながら祖国日本に帰る日を信じて精根尽き果てるまで、死闘とでも申しましょうか、人間の限界に挑んで参りました。今日という日を迎え、はや五十有余年の年月を経過しました。しかし、今改めて過去を振り返って、共に枕を並べた幾多の戦友が、あの極寒の地に、未だ雪、雨、風の嵐の下に帰りたくとも帰れないでいる事を思う時、本当に胸の熱くなるを覚えます。

昭和十九（一九四四）年の十月召集されて現役兵として、北満の地、東寧の第九二九部隊に入隊を致しました。冬の厳しい北満の寒さは、初年兵最初の年で本当に身体の堪えられない感じでした。

南の島々では激戦に次ぐ激戦が続いていると聞かされ、私達部隊は毎日馬の手入れの明け暮れ。

年が改まった昭和二十年の初めに部隊は戦局の変化により内地移動になり、内地防衛の任に当たる事になった。しかし、私達数人でしたが、新京（長春）の教習隊に移りました。段々と戦局が拡大し厳しさを増す中で、教習隊の教育訓練もハードなスケジュールで、共に机を並べた戦友と健闘を誓い合いました。日一日と迫る戦況の変化により、私達も教習半ばでそれぞれの実務に就く事になりました。実務に就いて数日と言っているでしょう、本当に当時は信じられない敗戦、我が耳を疑いしましたが、現実です。

それからしばらく確たる指示命令もなく数日を過ごしました。年月日の記憶は定かではありませんが、九月の初め頃だと思えます。南新京で武装を解除され、貨物列車に乗せられ、北の果て黒河に着きました。ここからソ連のブラゴエシチェンスクに渡りました。そこで、息のつく暇もなくス

レーチェンスクという所に移りました、ここから私達の苦難の第一歩が始まりました。当時は、いつ、どこまで行くかも知らせずに、一路山奥に向かって行軍に行軍を続け、進んだ先は「シヤフタマ」という辺鄙な山深い部落でした。目的地のシヤフタマ収容所は半地下造りで、環境そして衛生面からしても決して良いとは申せませんでした。

捕虜の身と、一日も早く祖国日本に帰る為には我慢に我慢を重ね、お互いが励まし合いながら生きなければなりません。特に食料については筆舌に尽くしがたき僅少な量と、考えた事も見た事も無いお粗末な糧秣の提供で、戦友同士嘆くばかりでした。私達大隊は収容所に入り、休む暇も与えられずに即作業に狩り出されました。

作業は森林伐採と鉸山労働の二つに分かれました。私は最初に森林伐採に回されました。

飢えと寒さの中で不馴れた伐採作業は非常に危険が伴い、しかも雪の中の作業に大変難儀を致しました。二人用の鋸（約一・五メートル位の長

さか?)を二人一組で共に引き合いながら木を倒す。なかなか呼吸が合わないと上手にいきませんでした。少し腰を伸ばすとマンドリンを持ったロシアの警戒兵が来て「働け、働け」と合図をしきりと言っていました。作業の日数ひかずが続くに従ってロシア兵も顔馴染みとなりまして、あまり強くは言わなくなりました。ふと思うに、やはり人間なんだとその時つくづく思いました。また或る日のこと、私達大隊で元班長だった先輩が、伐採途中、倒木の下になり大怪我をされました。寒さの厳しいシベリアでは、木も芯まで凍りつくそうです。その方は手、足に後遺症が残り、本当に気の毒に思いました。

それから私達は、約一年位続けた伐採作業から鉱山労働に回されました。これまた尋常な作業ではありませんでした。未開の鉱山で、目的は「モリブデン」を採掘する為と聞いていました。私が入山するようになった時はまだ立杭で地下十数メートル下ったところでしたが、だんだん掘り下げ

八十六メートルまで掘り下げました。しかし、これまでの作業は本当に大変な作業で、就労時間も四時間が限度でした。なぜならば、杭の壁面より流れ出る水が多く、私達作業者は常に頭よりずぶぬれの状態で、彼らが与えた雨具は全然使用できる物ではなかったからです。与えられた時間四時間、人間の生死の限界でした。手、足の感覚がなくなり、気力だけで交替を迎え、丘に上がるという苛酷な作業でした。

考えると、若いからこそできたことと思っています。このシャフタマの鉱山労働を終えて、約二年の間労苦を共にした戦友、たしか長野県のご出身と聞いていましたが、小沢君が犠牲になりました。雪の夜でした。収容所の裏山に雪をかき分けて埋葬という形をとった覚えがあります。本当に未だに残念で、シャフタマを思う時、彼を思い出す日々です。

それから私達作業大隊はシャフタマを離れ、チタ市の第二分所に移りました。またここもお粗末

な幕舎で生活が始まりました。既に駐留の大隊がいました。その人達は日本の兵舎のような建物に入っていました。私達は、後で分かった事ですが、チタの第二分所には元日本共産党の袴田里見の実弟で袴田陸奥夫が在籍して、シベリア天皇として君臨していました。また、民主運動もここを起点として各収容所に配信していた様子でした。私達も次第に民主運動を活発に展開する事になりました。作業もシャフタマと違って、農場とか肉工場、製粉工場といった、比較的身体の負担の少ない仕事内容でした。また食料の方も、職場で少ない分は補充でき、一時は幸せだなと感じました。また民主運動に戻りますが、作業を終えて収容所に帰り夕食を終えてから約二時間位は、少グループに分かれて共産党（ソビエト）の歴史の講義を受けなければなりません。これに反すると必ず反動分子として吊し上げられます。週一回は大講堂で弁論大会や反動分子の摘発等が主に行われました。私も指導部（ソビエト）から指定された袴田

一派の人達）より特別に指導を受けまして、職場や夜間の講義等にも顔を出して来ました。あれから長い捕虜生活四年三カ月、青春を費やしてまいりました。ようやくにして祖国日本の土を踏む事ができたかと思うと、なんともやるせない気持ちでいっぱいでした。

今改めて思う事は、未だにあの凍土に屍をさらされた戦友の遺骨が一日も早く故郷に帰る事のできるのを願っております。